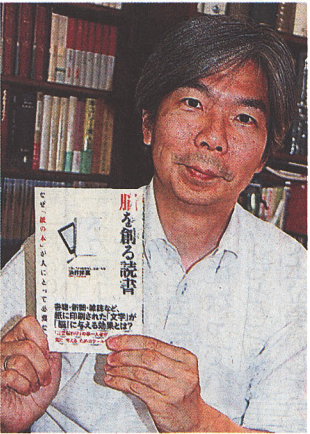


考えるためには紙の本

言語脳科学を専攻する東京大の酒井邦嘉教授(47)＝写真＝は学生にレポートの手書きを義務づける。「『書いたけど納得がいかない』『どこに納得がいかないのか』と疑問が湧き、能動的に考える力を引き出せる」と、手書きで「考える」ことの大切さを強調する。

近著「脳を創る読書」(実業之日本社)では「(電子書籍を利用することで)考える前に検索した方が楽、自分が考えなくても他の人が考えていると思ってしまう。考える機会を奪ってしまう」と、「電



子の活字」だけに親しむことへの警鐘を鳴らす。

一方、紙の上に記された活字には「個性」があり、紙の質、活字の形、インキの違いがきっかけになり「後で思い出そうとした時に、内容まで思い出すことがある」と語る。

「サクサク読むには電子書籍は向いているかもしれないが、考えるためのツールとしては紙の本は手放せない。使い分けた方がいいですね」と「適材適所」を勧める。

【小野博宣】